

撰擇から廻向へ

松原祐善

一

法然上人の淨土門佛教獨立の宣言書は選擇本願念佛集であるが、その製作の動機が藤原兼實公の請によるといわれる。而して選擇集の末尾には一經ニ高覽之後埋ニ于壁底莫遺ニ窓前ニ恐爲レ不レ令ニ破法之人墮ニ於惡道ニともあり、周知の如く上人在世中はこれを祕して公に發表さるゝことがなかつた。所謂門下三百八十餘人中特に選擇集の書寫が許されその付屬をうけた門弟は現存の資料には僅かに隆寛・證空・辨阿・親鸞等が指折らるゝに過ぎない。しかしこのことは上人の祕密主義によることゝはいえない。當代の教團史を緝けばその間の事情は充分に肯かれうることである。選擇集は當時の日本の教團並に教學の傳統をその根柢より震撼せしめた宗教改革の書で

あつた。しかし法然上人はもとより目前の既成教團そのものを改革せんと意圖されたものではなかつた。當時の叡山は平安末の貴族の階級社會をそのまゝにうつして全く名利の巻と化し、徒らに朝廷貴族の要望に應じて加持祈禱をことゝしていた。既に上人は早くこゝを遁れて靜寂な黒谷にありて修道にこれつとめていた。その出家の動因が夜討に逢うた父時國の臨終の教訓によることであり、幼き日の魂の傷口が大きいだけに比類まれなる苦闘が續けられていた。出でゝは嵯峨の釋迦堂に祈願をこめ、また諸宗の學匠を諸方にたずねて道を問うた。しかし法然の魂はそれによつて遂に救われなかつたのである。私は後の上人が叡山を下り、專修念佛を標榜して新しく淨土門佛教の一宗の獨立の宣言をなすにさきだち、承安五年春、黒谷の報恩藏にありて漸く四十三歳の上人

におとすれた内的革命の大いなる出来事を思う。かの舜昌法印の勅修傳第六に「かなしきかな、かなしきかな、いかゞせん、いかゞせん。こゝに我等ごときすでに戒定慧の器にあらず、この三學のほかに我心に相應する法門ありや、我身に堪ゆる修行やあると、よろづの智者にもとめ、諸の學者にとふらひしに、をしふる人もなくしめす輩もなし。然る聞なげきく經藏に入り、かなしみく聖者にむかひて手づからみづからひらき見しに、善導和尚の觀經の疏の一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定業順彼佛願故という文を見得てのち我等ごときの無智の身は偏にこの文をあふぎ、もはらのことばりをたのみて念々不捨の稱名を修して決定往生の業因に備ふべし。たゞ善導の遺教を信するのみならず、又あつく彌陀の弘願に順ぜり、順彼佛願故の文ふかく魂にそみ、心にとゞめたるなり」と記している。

勅修傳はその前文に「おほよそ佛教おほしといへども所詮戒定慧の三學をばすぎず、所謂小乘の戒定慧、大乘の戒定慧、顯教の戒定慧、密教の戒定慧なり。しかるにこの身は戒行に於て一戒をもたず、禪定に於て一もこれ

を得ず乃至」と置かれているが、思うにこゝに惱まれてあることがらは、戒定慧の三學による佛道修行の困難なことが訴えられてあるのであろうか。恐らく上人の課題は單にそういうことではなかつたと私には思われるのである。上人は武士の子として特に健康な魂と俊敏な天性に恵まれ、しかもその努力精進に於て全く絶倫の師であつた。上人の述懐として「われ聖教を見ざる日なし、木曾の冠者花洛に亂入のときたゞ一日聖教を見ざりき」というのがある。叡山佛教の課する修道の困難は恐らくはこれを克服しおほせたことであらう。既に山中にありてはやくより智慧第一の譽をかちえていたことであつた。しかしこの上人にして實は大乘小乘・顯密兩教の三學の修道に洩れて、我等ごときの無智の身として、永遠に救いなき自己の存在に動轉苦悶されていたのである。善導大師の一心專念彌陀名號の御文もこの無有出離之縁の自覺に仰がれ來つたものである。而して上人の苦惱は上人一人にとゞまるものでなく、時代そのものゝ苦惱であり、むしろ人間の歴史そのものゝ悲痛を上人一人の身に擔われて惱まれてあつたことであり、新しき時代の光

を求めて佛教本來の歸趣が問われてあつたと推察されるのである。拾遺古德傳にかつて源信僧都の往生要集に就て、師の叡空と論議し觀念を中心とする師説に抗してあくまでも念佛を中心とする自説をひるがえさなかつた青年法然の面目をつたえている。長年の課題が時節到來し、時機純熟して遂に法然自らの上に大いなる決斷を迫つたものとも考えられる。かくて眞に凡夫の報土往生という本願の不思議を闡明するためには、叡山傳統の源信僧都の教學をも超えて新しく淨土門佛教の獨立を要としたのである。こゝに聖道門・淨土門の敎判をかゝり偏に善導一師の經釋により、直に阿彌陀の本願を仰いで萬善の諸行を選捨し、専ら念佛の一行を自己に選り取つたのである。いうまでもなく念佛の一行を選り取つたということは、佛の本願に信順してのことには相違ない。すなわち自己が念佛の一行を選り取つたことでは決してなく、佛かねてしろしめしての本願であり、この本願に召喚され、本願の念佛に自己が選り取られしことに相違ないことであるが、その念佛往生の本願を今や新しく選擇本願と仰いでこられたことは法然上人にはじまる。選擇

の二字よく上人の佛教を語ると共に、またかの黒谷の報恩藏に於ける上人の回心の消息をも物語るものといえないであらうか。かゝる難關を透過して、上人は「歡喜のあまり予が如き下機の行法は阿彌陀佛の法藏因位の昔かねて定め置かるゝやと、高聲に唱へて感悅隨に徹り落涙千行なりき」と十六門記はつたえている。

二

選擇集の開版は門弟の平基親によるものであり、建曆二年九月世にはじめて公にせられた。建曆二年といえは法然上人の入滅が建曆二年正月である。而して開版後直ちに同年十一月、明慧上人高辨は摧邪輪三卷を著して選擇集を駁撃したことは有名である。具には於一向專修宗選擇集中摧邪輪という。更に翌年六年摧邪輪莊嚴記一卷を製してその義を助成した。その内容は摧邪輪に十三難、莊嚴記に三難を數えて十六難を列擧しその要點を次の三難、一に撥去菩提心、過失、二に以聖道門譬群賊、過失に歸せしめている。以て選擇集が當時の敎界に如何なる波瀾をまき起せるものかを知ることが出來よ

う。菩提心撥無といえまきしく佛教教學の依つて立つ根柢が震ぶられたことになる。菩提心はあくまでも佛道の正因であり、往生の正行は菩提心であり、念佛も菩提心を助くるものと思惟されていた。次いで嘉祿年間に山僧並榎の堅者定照が彈選擇を著して選擇集を破し、洛中門下の代表者である隆寛律師にこれを送つた。隆寛、顯選擇を作りてこれを返破せしことが、やがて隆寛・幸西等の流刑となり、叡山の僧徒は更に法然上人の大谷の墳墓をも破却して死骸を鴨川に流さんとまでした。——因みに法然上人の年譜を開けば、元久元年十月、北嶺叡山よりの壓迫あり、ために上人は門下八十九名の連署を以て有名な七ヶ條の起請文の誓約を叡山に送つている。翌元久二年十月、南都興福寺の學徒、朝廷に上奏して七道諸國に令して專修念佛を停止し、法然並に弟子等の罪科に處せられんことを乞うている。上奏の文は解脫上人貞慶の草するもので、およそ九失を算えて法然の開宗が天魔外道の所爲なりとして彈劾している。第一に立_二邪宗_一之罪をいうが、こゝには聖道八宗の外に淨土の一宗を開くことを難じたものであるが、一宗を開くにはまず朝に

奏して勅許をまたねばならない。法然は私に一宗を稱することは不當であることを責めている。しかしかゝる勅許への政治運動を要とせなかつたところに實は上人の眞面目もあり、時代の宗教的覺醒もあることである。その開宗が法然の私を超えたやむにやまれざる歴史の必然に出るのであり、そのことが決して既成教團の改革を意圖してはではなく、あくまで人間そのものゝ解放、純一な時代人の宗教的要請に應えたものである。上人は流刑に當りても「われたとひ死刑に行はるともこの事はいずばあるべからず」とその揺るぎなき確信と燃ゆる信念を表明している。建永二年二月、專修念佛停止の宣旨下り師弟の所刑となつた譯であるが、同年三月、上人は配所の途につかれた。いうところの興福寺奏狀、九ヶ條之事は一、立_二邪宗_一之罪、二、私販_二新圖像_一、三、輕_二侮釋尊_一之失、四、癡_二萬善_一之事、五、乖_二背神靈_一之罰、六、昏_二昧淨土之旨趣_一之愆、七、謬_二軼念佛奧義_一之極、八、濫_二損釋衆_一之愆、九、亂_二壞國家_一之賊、が數えられ、各條に長文の釋明がある。漸く上人の歸洛を許されたのは建曆元年十一月であり、大谷の禪房に住して翌年正月二

十五日八十歳にて入寂された。

選擇本願念佛集は略して選擇集と呼稱されるが、この選擇の二字よく法然佛教の面目を語るものと思われる。

而して選擇の二字に選擇選取の廢立の義あることがいわれる。日本の八宗をあげての法然への排撃もまさにこの選擇の二字にあつたといえよう。上人は特にこの語を異譯の大阿彌陀經・清淨平等覺經に見出されて來たのであるが、念佛往生が正しく如來の選擇本願であること、念佛は選擇本願の念佛の故に絶對の信がさゝげられたのである。選擇集の開卷劈頭には選擇本願の行體たる南無阿彌陀佛の御名をかゝげ、往生之業念佛爲本と標擧されてゐる。この總標に明かに菩提心爲先の道と諸行往生の道とが簡ばれ廢捨されてあることである。いわばこの總標が選擇集の全内容を物語ると共に、當代に於ける教學の傳統を大きく回轉せしめたものといつて過言であるまい。この法然上人の事業をまつて、選擇本願という彌陀久遠の大いなる歴史的事實に覺醒し、今や新しく佛道實踐の中心に、南無阿彌陀佛の御名が仰がれ、この御名に於て、この御名の法を遁し、この御名そのものに佛道の

始終が盡されて來たといつてよい。これは驚くべき改革といわれねばならない。こゝに佛教は法然上人をまつてこの日本に全く新しくかきかえられたというて過言あるまい。而して「阿彌陀如來法藏比丘の昔、平等の慈悲に催ふされて普ねく一切を攝せんが爲に、造像起塔等の諸行を以て往生の本願と爲したまはず、唯だ稱名念佛の一行を以て其の本願と爲したまへり」(選擇集・本願章)佛教は造像起塔の伽藍にあるのでなく、學解・修道そのことにあるでもない。本願念佛の一行は廣く庶民の生活をさながらにつゝみ、眞に宗教的覺醒の息吹を喚起して佛敎本來の歸趣を明かにし、平安期の伽藍の貴族佛敎より離れて鎌倉期庶民の佛敎を展開して來たのである。

三

選擇集本願章には、諸行を選擇して念佛の一行を選擇したまう彌陀選擇の願意をさゝひらかんとして法然上人は左の間答をかゝげている。

問曰普約諸願選捨麤惡選取善妙其理可然。何故第十八願選捨一切諸行唯偏選取念佛一行爲往

生本願。

答曰聖意難測、不能輒解。雖然今試以二義解之、一者勝劣義二者難易義。初勝劣者念佛是勝餘行是劣。所以何、名號者是萬德之所歸也。然則彌陀一佛所有四智・三身・十力・四無畏等一切內證功德・相好・光明・說法・利生等一切外用功德皆悉攝在阿彌陀佛名號之中。故。名號功德最爲勝也。餘行不然。各々守一隅、是以爲劣也。乃至次難易者念佛易修諸行難修乃至

且らくわれわれは鎮西派の聖岡師の決疑鈔直牒をかりてその義を敷衍して見よう。——左の引文は直牒・祕抄ともに惠空師の叢林記中所引のものにならえり——

「勝劣の義難思、聖教の常談、事理相對の時は理は勝れ、事は劣なり。相・無相對の時は無相は勝れ、有相は劣なり。定・散相對の時は定は勝れ、散は劣なり。然るに今の念佛は事業なり、有相なり、散善なり。餘行より劣ると云ふべし。今何ぞかへつて勝の義を存するや。又餘行を以て各々一隅を守るの行と言ふ事然るべからざるか。實教の所談には一行一切行と談す。實

に事理圓融の道理、何れの行か缺減あらんや。難に答ふるに二あり。先づ初難を會す、事・理相對の義は法相を判する時誠にしかるべしと雖も、今は能攝・所攝に約し、其の勝劣を論するなり。謂く名號は是れ能攝、萬行は是れ所攝なり。若くは無相、若しくは有相、事・理、定・散等の一切功德、悉く名號の中に攝在す。故に勝の義存するなり。(乃至)次の難に至れば、實理は圓融の用を具して一行一切行なりと雖も、若し修行の時に約すれば、凡夫未證の故に一行一切行と爲すべからず。然れば當宗の意、偏に本願他力の旨を談する故に、佛修得の功德を行者に與ふる故に、萬行圓融の用、凡夫未證の上に施すなり。是れ即ち法藏比丘兆載永劫に六度萬行を修し、遙かに果後の利益を期す。事専ら我等が往生の爲なり。故に因位修得の萬行、果位の名號に納めて我等の生因に與ふる故に、之を唱ふれば因位果徳の功德我等の識心に薰成して無邊の功德を得るなり」

聖岡師の釋はいかにも整合的であり、合理的な解明であるが、ときに選擇の願意が覆われて功利的な功德主義

に墮する危険なしといえないであろう。これに加えて西山派に最も重んずる行觀師の祕鈔の解釋を添えて置く。

「萬德所歸の功德にて往生すといはば、名號の不思議力に非ず、是は色も替はらざる諸行本願、諸行往生といふ義なり。諸行を各別各別にて往生を許すと、取り集めて名號に攝在して往生すといふ替目計りなり。別に曲りなく只同じ事なり。尙ほ是れ取り集めてといふ時は大いなる諸行往生なりと難すべし。答へて云く、名號にも是の如き云分すべきことありと雖も、且らく試みの分にて今師大谷の御本意に非ず。萬德所歸の名號といふ分は難易の位の名號なり。諸師祖師等の勸めたまふ萬德圓備の報身・名號の位なり。

(略)西方要決に云く(略)道綽(略)是皆萬德所歸の名號の位なり。此位は難を捨て易を取れと勸むれども、未だ通別を分たざる名號の位にして諸佛道同の名號なり。名號の袋に萬行を入れて生るゝ間、萬行が眞實の財にて、名號は袋にて方便散稱の淺行なり。和尙の本意の名號は觀經にて定散之中唯標專念名號といふ位

なり。此時定散の萬行は袋にて、此袋中より顯はる名號といふ時は無上大利の功德、諸佛内證肝心の法財にあるなり。この時非定非散の名號と云て定散の別に非ざる超世の行なり」

行觀師は名號が諸行に勝るゝ所以は、實は諸行と念佛との比較の論ではなくして、名號の勝るゝは如來の選擇本願の故である。このことは諸行と同列にまた同質に語るべきではない。諸行は非本願である。本願の名號は如來の五劫思惟の無漏智より出するものであり、大悲無上の方便である。念佛往生の道が彌陀不共の超世無上の本願なることを強く主張するゝ如くである。

扱て親鸞聖人は本願の念佛を不廻向の行と著眼しておられる。——教行信證の行卷には選擇集の總標とその總結の文を引用し、恐らくはそれを以て選擇集の全體を盡さるゝ思召であろうか、その引用の文を承けて、明知、是非凡聖自力之行、故名不廻向之行也、大小聖人重輕惡人應皆同齊歸選擇大寶海念佛成佛と領解されておる。不廻向の語はもと選擇集二行章の正雜二行に就て五

番の相對あり、その第四の回向・不回向對によることがいわれるが、念佛は行者自力の廻向にあらざること、すなわち聖人には如來廻向の大行と仰がれているのである。既に行卷の劈頭に、大行者則稱無碍光如來名斯行卽是攝諸善法具諸德本極速圓滿眞如一實功德寶海故名大行然斯行者出於大悲願と仰せられている。

思うに法然上人にありては末法時という歴史そのものの悲痛を擔つて佛教最後の歸趣を目標とされたといおうか、一代佛教の歸結を觀無量壽經流通分に見出し善導大師の御釋に導かれて定散の萬善諸行を廢捨して本願念佛の一行を選取せられたのである。その資の親鸞聖人は師によりて教示されし佛教の歸趣を出發として、かつて上人に廢捨せられし菩提心をもまた一切の諸行をも、本願に眞・假を見ることにより新しき光のもとに新しき意義をになつて批判肯定されて來た。そのことは決して聖道門への妥協でなく師の選擇の本義がそれに徹せられたことである。法然上人は聖道門に相對しての淨土門であつたが、親鸞聖人にありては師の淨土眞宗を絶對不二の教と仰ぎ、そのなかに聖道門佛教が解消せられたというて

或は過言であらうか。それはともかく教行信證の讀者の批判にまかせよう。かくて只管彌陀廻向の御名の法を讃嘆してやまない親鸞聖人に、師の選擇の佛教から廻向の教學への展開に出逢い、少しくその道すじを私は自分ながらに辿りて見たいと思ひ起つたのである。

四

教行信證の後序に親鸞聖人は法然上人より選擇集の付屬をうけられた深い感激をつづられている。聖人の吉水入室後五年をへた元久二年のことである。そのなかに特に本師聖人今年七旬三の御歳なりと感嘆されているが、それは單に過去の記憶を新にするというよりも、聖人はその生涯を盡してその付屬をうけし今年に生きておられたともいえよう。教行信證の製作はその後相當の年月を經、越後の謫居時代より關東常陸の教化期を巡りて、恐らくは聖人の歸洛後にありての完成と想像されているが、その製作にあたりて今更らに選擇集の付屬という歴史的事實を感佩し「悲喜の涙を抑えて由來の縁を註す」といふ「良とに師教の恩厚を仰ぐ」といわれている。或

は教行信證の製作を以てその歴史的使命に應え得た大いなる喜びがそこにあつたのであらうと思われる。法然上人の門下中われわれは選擇集の付屬をうけた五・六輩の他の門弟の名を算えることはできるが、かくも無限の感懷を以て自らそのことを記されているのは親鸞聖人の他にないことである。私はかつて法然・親鸞をあくまで一人格として見ようということや或る先覺より承つた譯であるが、ともあれ日本に於ける宗教改革という事業はこの二聖人をまつて果遂された譯にて、今日世界の精神史上にも大切な地位をもつものと思われるが、先ず以て三國佛教史上に於て重大なる歴史的意義を擔うておることである。而していま選擇集と教行信證をいえば或はこれを拜讀して、往生要集と選擇集との相違以上に感銘を異にするものがあるかもしれない。いわば選擇集は淨土教獨立の宣言書であり、理路整然たる組織をもちまことに「見る者諭り易し」である。教行信證は既にその量に於て遙かに大であり、前者のいかにも説明的であるのに對し、これは至つて表現的である。「聞くところを慶び獲るところを嘆する」という懺悔・讚嘆を基調としつゝ

御自釋なる領解をも含めて文類聚なる獨自の形式をとつている。それは決して自己の體驗を基礎づけるためとか或は論證のための引用ではなく、寧ろ自己の一切をつねに教法の歴史をかえすという聖人の教學の特徴といえよう、その點またいかにも表白的である。そのことは決して教行信證に組織がないということでもなく、思索がないということではない。教法の聞思こそ聖人のいのちである。而してこれは一代佛教を攝めた比類稀なるすぐれたる佛教々學の體系書である。しかもその無限の深さと重量に於て單に一宗の書というよりも日本民族が産んだ眞に人類の書であるとの感銘が深い。しかしいま兩書の比較を論じようというのでなく、ともかく教行信證は選擇集に應えて生れて來たことに相違ない。又親鸞聖人に於ける選擇集の付屬の祕義もこの書に於て開示されてあることに相違ない。

從來とも法然上人の教學と親鸞聖人のそれとの比較に於てよく論議されて來て來ることであるが、例えばわれわれは香月院師の選擇集講義のなかに二十五箇の異同辨なるものを見出すことが出来る。しかしかゝる法然・親

鸞の師資の教學の上に見らるゝ、異同が如何にして展開されて來たのであるうか。香月院師はその背景たる時代とか教界事情を以ていわれるが、更には個性の相違とか、法然は教法を説く立場にあり、親鸞は法を受くる聞法の立場に終始徹せられたものであるとか種々考えられもしようが、しかしそれらの説明に間違があるというのではないが、私は一見かゝる師資の教學の上に相違あらしめし根源に、まず以て兩聖人を結ぶというか、それこそ法然・親鸞を一人格とする最も内的な最も具體的な生命の必然が衝き當てられなければならないと思うのである。

たま／＼私は歎異抄の後述に傳えられている親鸞聖人の吉水にありての信心諍論の物語を想起せざるを得ないのである。そこには法然上人のおほせとして「源空が信心も如來よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も如來よりたまはらせたまひたる信心なり、さればたゞひとつなり」とのお言葉が記されている。善信の名は教行信證の後序に選擇付屬のこを述べらるゝに因み、又依「夢告」改「練空」同日以「御筆」令「書名」之字「畢」とある。以後聖人は善信と名のられて來たので、凡そ吉水にありて信心諍

論の行われたその時期も推察されよう。ともかくいま聖人の御ものがたりとして「如來よりたまはりたる信心」という法然上人のお言葉をきくのであるが、如來より賜りたる信心とは單なる他力の信の謂でなく、他力廻向の信の自覺の表明であることである。この如來より賜りたる信自覺の現在を或は後の日に無量壽經の本願成就文に讀みとられて來たといえないであろうか。聖人は無量壽經の阿彌陀の四十八の願言を仰ぎそれを解釋する眼を無量壽經の本願成就文に聞きひらかれて來たのである。

宗學の傳統的な解釋よりすれば、法然上人の親鸞への選擇集付屬の祕義は選擇集三心章の私釋の當「知生死之家以レ疑爲レ所止」涅槃之城以レ信爲レ能入の文に抑えられ、つまり選擇集の宗とする本願章にとかるゝ御名の名義はこの文を以て領受されたものというのである。而して正信偈・高僧和讃がこれを證して餘りあるといわれる。併せて私は教行信證に於ける三心一心の問答釋の上に、三心釋という勞作を通して聖人の何を意圖され何を闡明せんとせられたかを考えて見たい。まことに三心釋は教行信證の中心であり、その頂點であるといつて過言

でない。それは聖人に於ける永遠不滅の價値をになえる
 獨自の學問的勞作であり、親鸞の苦鬪の血涙はそこにあ
 った。了祥師に従えば教行信證を大きく分ちて教行二卷
 を傳承の卷とし、信卷以下を己證の卷と科しておられる
 (法住師の金剛錄による)。思うに傳承の卷を結びて正信
 念佛偈が置かれ、特に聖人の己證の事業を明す信卷に別
 序を置きて、信卷の中心が三一問答釋にあることが示さ
 れている。傳承の卷は偈頌を以て結ばれ、問答釋を以て
 己證の事業が開顯されてくることはまことに適しい。す
 なわち傳承の卷には教主釋尊以來三國の歴史的傳統の事
 實を通し本願念佛の法の傳承が仰がれ、この傳承に佛道
 の正信が開け、己證の卷に於てかゝる三國高僧の歴史的
 傳統を現在あらしめる根源の久遠の歴史、法藏菩薩の永
 劫修行の内面が開顯され來つた譯であるが、かゝる無限
 の深さをもつ問答釋の事業であるが、要をいえばこの勞
 作に於て他力廻向の眞實信心の自覺の内面が無底の深さ
 に於て掘り下げられ開闢されたものといえる。試みに至
 心釋を開けば「竊かに斯の心を推するに、一切の群生海
 無始より已來乃至今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨

の心なし、虛假詭偽にして眞實の心なし、是を以て如來
 一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て
 菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修一念一刹那も清
 淨ならざることなし、眞心ならざることなし。如來清淨
 の眞心を以て圓融無碍不可思議不一の稱不可説の至徳を
 成就したまへり。如來の至心を以て諸有の一切煩惱惡業
 邪智の群生海に廻施したまへり。即ち是れ利他の眞心を
 彰す故に疑蓋雜ることなし。斯の至心は則ち是れ至徳の
 尊號を其の體と爲るなり」とある。

信卷の別序にはこの三心釋の事業の意圖が率直に語ら
 れてある。夫以獲_レ得信樂_ニ發_キ起_ル自_レ如來選擇願心_ニ開_ニ闡
 眞心_ニ顯_ニ彰_ニ從_ニ大聖矜哀善巧_一といふ末代道俗近世宗師
 沈_ニ自性唯心_ニ貶_ニ淨土眞證_ニ迷_ニ定散自心_ニ昏_ニ金剛眞信_一と
 悲歎し爰愚禿釋親鸞信_ニ順諸佛如來眞說_ニ披_ニ闕論家釋家
 宗義_ニ廣蒙_ニ三經光澤_ニ特開_ニ一心華文_ニ且至_ニ疑問_ニ遂出_ニ明
 證_一とある。かゝる勞作を爲されねばならないことは、
 法然上人なき後の教界事情よりして如何に迫まられてあ
 つたかを推察出來よう。聖道諸宗よりの迫害なお續いて
 やまず、外近世の宗師は等しく自性唯心の獨善に沈み、

信體験を内在化して淨土の眞證を貶している。内は定數の自信に迷惑して他力金剛の眞心に昏く、門下の學匠多く聖道門への妥協となつて師の選擇の本義はいよいよ昏睡せしめられ、ひそかに臨終來迎を目標として個人的主觀的なる觀想往生を期している。こゝに師の選擇の本義に徹しそれを新しく開顯してたゞ教學的使命をになえるものはひとり親鸞をおいて他になかつたといえる。

思うに法然上人の立つところは偏依善導一師と大師の觀經教學に導かれて、直ちに阿彌陀の選擇本願たる第十八の願言に接せんとせられるようである。親鸞聖人は釋迦の本願成就文に立ち、これを媒介として本願の願言を仰ぎ、至心信樂欲生の本願の三信をきゝ開き廻向の本義を闡明された。親鸞聖人はもと善導大師の深刻無比の觀經教學に導かれ、更に曇鸞大師を介して無量壽經の根本の傳統にたちかえられたものゝようである。而してやがては法然上人の所謂一願該攝の法門に對する、聖人の五願分相乃至八願建立の法相を以て本願を解釋されたことであるが、このことは外面的には二見法然上人の傳承の形式を破れるが如きも、法然上人の選擇の精神は更に内

面的に深化徹底せられ自覺的に闡明され來つたのである。

選擇集の付屬をうけし門弟の一人である鎮西の辨阿上人に徹選擇の著がある。そのなかに「彌陀の本願を以て選擇と名くる聖教の中に其の證據ありや」とたづねて、智度論三十八より引文して「龍樹菩薩の言く、共に十方清淨世界を觀じて自ら其國を莊嚴す、阿彌陀佛先世の時法藏比丘と作る、佛將導して遍く十方に至り清淨國を示して、淨妙の國を選擇せしむる如し。上人（法然）の料簡、菩薩の聖教と符合す、彌々以て隨喜の涙を流す」と感激している。それは法然上人にありては未だ選擇の語が龍樹菩薩の智度論にありしことに氣附かれていながつたが、後の日辨阿上人自らこれを發見して今更ら師說に隨喜しているのである。かくて辨阿は「沙門某甲昔聖道門を學するの時、聊か彼の淨佛國土成就衆生之義を習ひ傳へ、今淨土門に入りて後に此の選擇本願念佛往生之義を相承す、二師の相傳を以て、聖教の諸文を見るに其義更に以て教文に違はず、單の聖道門の人、單の淨土門の人は知見すべからず。聖道淨土兼學の人これを知るべ

し」と記している。その門弟の良忠師は徹選擇の意味を解して「徹の字意如何、答ふ、選擇集の念佛は正しく本願稱名之一行に局る。智度論の念佛は廣く三福六度之行に通ず。然るに本集の念佛未だ念佛の相を釋せざる故に、別より通に徹する故に徹選擇という」と釋している。思うに通を別に盡して徹ともいえようが、別を通に徹せしめるといふことは、徹ではなく却つて選擇の本義を解消せしめる結果になりはしないであらうか。聖道淨土兼學の者にしてといふことはあまりにも知解に捉われた見解と批評されても仕方がない。これと思合わされるのは今日經典批評家の無量壽經の成立過程を論じて、經に説く四十八願を以て菩薩の淨佛國土の本願思想の發展と解釋され、かゝる本願思想の起源はもと本生譚に由來するところがいわれる。經典の淨土莊嚴の文字も印度に於ける天部の莊嚴より來ているなど、遂には阿彌陀佛も印度神話中の神のごとくに指摘されようとするのであるが、かゝる經典分析の方向がいかに徹に入つたとしても、われ等の經典としての無量壽經の精神は決して明かにさるゝこととはない。淨土三經を離れてひとり無量壽經は見られな

いと共に、印度以來の高僧の歴史的傳統の事實、その經典解釋の歴史の歩みを離れて無量壽經流傳の歴史もなく、無量壽經そのものもない譯である。そこには經典ではなくして印度の古典が見られているに過ぎない。

五

しからは無量壽經の本願成就文はそのまゝに親鸞の信體験の現在を語るものとして、その經文は聖人に於ていかに讀みとられて來たのであるか。無量壽經下卷の卷頭にまず十一願成就文、次いで十七願成就文、それと一連して十八願成就文が置かれている。聖人の五願別開の本願解釋もこの成就を立場とするところに出ずるものといえないか。いうところの十八願成就文とは經に諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼國即得往生住不退轉唯除五逆誹謗正法とある。周知の如く親鸞聖人はこの文を「其の名號を聞て信心歡喜せんこと乃至一念せん、至心に廻向せしめたまへり」と讀みとられて來た。法然門下にありては上人を含めて「その名號を聞て信心歡喜し、乃至一念し至心に廻向して」と讀み下して、乃至

一念は因願の乃至十念、付屬の乃至一念と等しく行の一念と見られている。いま親鸞聖人は「信心歡喜せんこと乃至一念せん」と文章を切り、信の一念、また一念の信心と見られておる。すなわち信卷には「一念とはこれ信樂開發の時尅の極促を顯し、廣大難思の慶心を彰すなり」とも、また「一念といふは信心二心無き故に一念といふ、これを一心と名づく。一心則ち清淨報土の眞因なり」と解釋されている。聖人はこれを唐譯の無量壽如來會の能發一念淨信「歡喜とあるに參照してその明證としてゐる。

南條文雄師によれば現存梵本はこの唐譯の文に親しく「其故は一切諸有情彼世尊無量光の名號を聞く者は聞き了りて、少なくとも一念發起して信心俱行の愛樂を以て念を發起せば、無上なる正等覺より退轉せざる位に住すればなり」と譯され、特に住するの梵語が現在時法の形を用いたれば聞信の時直に不退に住すること明かなりといわれている(師の無量壽經講録による)而して師は信心歡喜の語が梵本にありて普通一般に使用さるゝ教法を信順する *saddhā* にあらずして、特に澄淨、平安、歡喜、純粹、信心、安靜等と譯する *prāsāda* であることを指摘せら

ることである。われわれはこの語に無量壽經の信心のすがたをきくことが出來よう。思うに淨土三部經のなか、觀無量壽經にありては遂に信心の語を見出すことが出來ない。さすがに善導大師は地想觀の心得無疑の一語をとらえて信心を強調されていることは注目されてよい。阿彌陀經には一切世間難信之法とあるに出逢うのみ。無量壽經に來りてはじめて本願の文に至心信樂とあり、成就文に信心歡喜とあり、智慧段に明信佛智等、流通分には歡喜信樂、專心信受、應當信順等多く信を見出すことが出來るのである。又念佛の語にしても、三經のなかにたゞ觀無量壽經にのみ念佛衆生攝取不捨と念佛の語はあれど、阿彌陀經には執持名號とあり、無量壽經また本願には稱我名者、聞我名字等、成就には聞其名號とあり、流通に聞彼佛名號とありて、名號をいう。こゝに三經に於ける純一なる念佛信心の傳統の道を知ることが出來る。大乘經典のなか本願を説く經は多く、又彌陀を讚する經のみ選びとられて本願念佛の純正なる道を傳承されし、佛道實踐の歴史の勞苦を感謝せしめられる。而して

この三經に於てのみ、名號の救濟的眞理をきくと共にそれへの認識の眼が與えられるのである。

扱て南條師によれば梵本には成就文の至心廻向願生彼國即得往生の語に相當するものがない。しかし聖人にありては至心廻向の四字はいのちであり、眞宗の眼目である。われらに一念の信心をあらしめ、また不退轉の證をあらしむる根源の事態というか、われわれはそれに於て絶對現實に觸れしめられ、大涅槃の證を目前にする。覺師の願々鈔には「至心廻向の四字は成上起下とならふなり」とある。われらが信心と住不退轉の證は決して人間自力の功によることではない。人間の理性によることでもなく修道の功によることでもない。往生之業念佛爲先であつて全く彌陀至心の廻向によることである。この如來の廻向心に觸れて名號の名義はわれらに全領されたといえよう。すなわち名號は如來廻向の御名であることである。聖人の三心釋によれば本願の至心は法藏菩薩永劫修行の經文を以て證明せられてあるが、本願の選擇といえは五劫思惟を以て知らされ、廻向をいえは永劫修行を以て信知せしめられる。本願の信樂には本願信心願成

就文として諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念の文を掲げ、本願の欲生我國は本願欲生成就文として至心廻向願生彼國即得往生住不退轉唯除五逆誹謗正法の文が引文される。本願の三信は至徳の尊號を體として至心、信樂、欲生と次第し、しかもわれらが至心信樂は如來の欲生すなわち廻向心に始まる。「欲生といふは則ち如來諸有の群生を招喚したまふの勅命なり。即ち眞實の信樂を以て欲生の體と爲るなり。誠に是れ大小凡聖定散自力の廻向にあらず。故に不同向と名くるなり。然るに微塵界の有情煩惱海に流轉し、生死海に漂没して眞實の回向心なし清淨の回向心なし。是の故に如來一切の苦惱の群生海を矜哀して菩薩の行を行じたまふ時三業の所修乃至一念一刹那も廻向心を首と爲して大悲心を成就することを得たまへるが故に、利他眞實の欲生心を以て諸有海に廻施したまへり。欲生は即ちこれ廻向心なり」とある。信樂とは「則ち是れ如來の滿足大悲圓融無碍の信心海なり。是の故に疑蓋間雜あることなし。故に信樂と名く。即ち利他廻向の至心を信樂の體となすなり」と仰がれているのである。

今一つ、聖人にありて本願成就文に一念の時を抑えられていることである。一念を信樂開發の時剋の極促といひ、また即得往生住不退轉を即時入必定と見てとられた。思うに他の法然門下にありては遂に佛法の時節というものがなかつた。従て十九願を非本願と簡びつゝも自力の罪福を信じ、臨終を期し來迎をたのむを以て信の保證とせざるを得なかつたのである。いうところの時剋とは永遠の今ともいえようか。無論永遠を觀想して時を忘れようというのではなく、永遠を包んだ今、今に永遠を包むこと、聖人は一念を抑えて時刻の極促をいわれるので、刹那の一念、而してこの一念、所謂過・現・未の三世を包みて前後際斷である。絶對の現在である。一念發起平生業成というが眞宗教義の核心といわれる。時節因縁の到來である。佛法の時節因縁、念佛の時節到るとは信樂開發の時節である。聖人の方便の卷に表白さるゝ三願轉入の文も「今特に」の文字が抑えられなければならない。「果遂の誓まことにゆえあるかな」の感嘆は二十願の不果遂者の願言を將來に望めることなく、所謂三生果遂などという解釋を遙かに超えて、今更らに自力執心の斷ち

難く、本願に背く疑心自力、佛智疑惑の罪の深き、本願の唯除五逆誹謗正法の唯除の自己に悲痛懺悔せしめられると共に、果遂の時節今既に到來せることの、換言すれば願成就の一念の時剋に遇えることの深き感激、その喜びでなければならぬ。すなわち二十願の願言にいわゆる自力の至心回向は主客・能所轉換して、さながらに願成就文には「至心廻向したまえり」と映されている。それが彌陀の召喚であり、本願に遇えることである。本願の成就とは本願の現在成就であり、如來の廻向成就の謂である。この如來の廻向に淨土眞宗ははじまる。教卷劈頭に「謹んで淨土眞宗を按ずるに二種の廻向あり。一には往相、二には還相なり。往相の廻向に就て眞實の教行信證あり」といわれ、證卷には「夫れ眞宗の教行信證を案ずるに如來大悲廻向の利益なり。若は因若は果、一事としての阿彌陀如來の清淨願心の廻向成就したまふ所にあらざることなし」と結ばれている。眞宗の教行證は廻向の教行證である。聖道諸行の教行證と同日の論でないといわねばならない。

かつて金子大榮師は教行信證六卷をいわば眞佛土の卷

を頂點として前四卷の眞實の卷を廻向の卷と呼び、後一卷方便化身土の卷を轉入の卷と科せられたことがある(教行信證講讀參照)。思うに廻向と轉入とはその體一なるものであるが、且らく廻向とは法の側に語られ、轉入・回心は機の趣入に約していわるゝ如くである。方便の卷に語らるゝ三願轉入の表白は、それだけに教行信證の所謂三序・正信偈と並ぶ重要な位置と意義をになえることを指摘されてよいと思う。

なお信卷には善導大師の横超斷四流を釋して「横超とは願成就一實圓滿の眞教眞宗是なり」とある。また「大願清淨の報土には品位階次をいはず、一念須臾のあひだに速に疾く無上正眞道を超證す、故に横超といふなり」といわれている。恐らくは横超の一語よく堅出・堅超・横出の三名目を生み、やがては聖人の一代佛敎の史觀たる二變四種の敎判を成せるものと思われる。かくて今や菩提心につきては横と豎の二種あることをいい、「横超とはこれすなはち願力廻向の信樂なり、これを願作佛心といふ、願作佛心即ちこれ横の大菩提心なり、これを横超の金剛心と名くるなり。横豎の菩提心その言一にして

その心異なりと雖も、入眞を正要と爲す。眞心を根本と爲す、邪雜を錯りと爲す、疑情を失と爲るなり。忻求淨刹の道俗深く信不具足の金言を了知し、ながく聞不具足の邪心を離るべきなり」とあつて、こゝに自力聖道の菩提心に對する鋭き批判をきくことができる。

かくして親鸞聖人は新しく本願成就文を立場として、遙かに因位の願言を仰ぎ、五願乃至八願を以て本願解釋の法相を建て、八願相對應して信心の自覺を内に深く掘り下げ、本願の横超的構造を自覺的に闡明されて來た。われわれは聖人をまつてはじめて他力信心の自覺道が開顯されてきたというてよい。法然上人の一願該攝の本願解釋は第十八の念佛往生の一願を以て四十八願の全體を盡すことにより、古今の諸師の本願解釋に對して、はじめて彌陀大悲の超世不共の根本本願が第十八にある所以のものが宣揚され、これを選択本願と仰ぐことにより、新しく淨土の一宗が開けた譯であるが、未だ他力信心の自覺の道がその敎學の上に充分明かにされなかつた憾みが残る。親鸞聖人の念佛往生の王本願たる第十八を開いて、選擇本願の行たる念佛は第十七諸佛稱名の願淨土眞實の行

選擇本(行卷、標擧の文)の成就と仰がれ、第十八願は至心願の行(信卷、標擧の文)と稱呼されて純粹信樂の願(正定聚の機(信卷、標擧の文)と稱呼されて純粹に信心の願、正定聚の機と仰がれて來た。もとより能所不二、行信不離、機法一體にして、十七・十八の稱名・信樂の二願は相離れず、恰も合せ鏡の兩面が限りなく更互に相映發してやまない如く、他力廻向の行信道として、その自覺を深化徹底していくのである。かくてわれらが正定の行業たる本願の名號は第十七願の成就したまうものとして、聖人は第十七を特に大悲の本願と呼稱し、この願の重大なる意義を見出されると共に、又往相廻向の總名を以て呼ばれる。まことに御名の成就こそ大悲廻向の全體であり、大悲本願の御いのちそのものである。この御名の法に於てわれらは佛に遇い、如來はこの御名となつてわれらを招喚したまうのである。信心としてこの御名のまこと、いわれに背くことの外にならぬ。御名をきく耳も御名からくる。而して賜つた信心はそのまゝに御名にかえるのである。一切は諸佛讚歎の御名の歴史にかえされなくてはならない。稱名報恩とはそのことであろう。眞實信心必具名號である。廻向の教學

にありて信心も淨土の證もこれを内在化することは許されない。そこに他力金剛の信がある。信そのものが如來の本願即ち御名より出づるのである。如來よりきて如來にかえる、念佛のひとり働きといえよう。われわれはここにつねに本願の唯除の機にめぐめ起たしめられる。包み得ざるものを包みたまうが御名の成就であつた。かくて往相廻向の名は十七願(往相正業)十八願(往相信心)十一願(往相證果)に通じて、又二十二願還相廻向に對應すれども、總じて廻向をいえば第十七願に歸する。往相・還相ともに名號の廻向に賜わる二相で、體別でないといわねばならない。近時還相に社會倫理をいうことはよけれども、社會倫理を説くことが眞宗教義の目的とするところでない。往相・還相は圓環である。無論そこには嚴密なる法相もありて往相・還相の混亂は教義上許されぬが、本願の御名の歴史に招喚され、救済の眞理に遇えることが往相といえるならば、自己の往相がそのまゝに佛の本願を擔つて佛道の歴史を形成せしめられてくることに還相が見られないか。既に自己の往相をあらしむる根源には諸佛菩薩の還相がある。(五九頁下段へ)